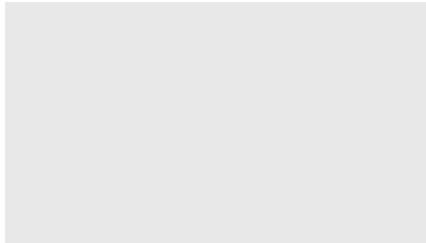


書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します



〈戦前戦中〉外交官の見た回教世界

笠間果雄著作選集

SAMPLE
S 笠間果雄著 書肆心水 hi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

目
次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

回教徒

回教総説 20
序言 18

一 回教という名称	20
二 マホメットの生涯	22
三 コーラン（聖經）	27
四 回教の教義・信仰と勤行	30
五 回教の宗派	41
六 イランのシーア派	44
七 回教諸国の興亡	48
回教徒の生活	57
一 回教の戒律	57
二 回教の暦	58
三 ラマダーンの断食	60
四 メッカ巡礼	65
五 回教の科学	70
六 回教の法制	73
七 回教と経済生活	75
八 回教徒の婚姻	78
九 回教の女性生活	85

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

回教徒及び回教民族の現状 90

一 日本の回教徒	90
二 満洲国の回教徒	93
三 支那の回教徒	96
四 中亞特にソヴィエット聯邦の回教徒	100
五 蘭印の回教徒	103
六 フィリッピンの回教徒（モロ族）	106
七 インドの回教徒	109
回教徒の人物	114
一 漢回の驍將馬仲英	114
二 アラビアの獅子王イブン・サウド	116
三 イランの建設者リザ・パハラヴィ皇帝	117
四 ケマル・アタチュルク	119
五 アラビアのローレンス	123
六 アガ・ハーン（附、イスマイル派）	129

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

沙漠の国

序 1337

ペルシアへ 1338

バクーからテヘランへ 1338
テヘラン——生別、死別 142

新公使館 144

ペルシア富士とテヘラン銀座 147

ペルシア皇帝と語る 151

イランを飛ぶ 160

テヘランからイスパハンまで 160

クムの伽藍 161

イスバハン 162

皇帝寺院 163

崇高門——帝王恋愛行進曲 164

四十柱宮（チエヘル・ソトウーン） 165

古橋の驚異 166

絨緞工場——心の紅糸 167

シラーズに向う 167

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

阿片の栽培	168
パフチャリー族	169
ジユルファ——アルメニア町——アルメニア教会	170
アバス大帝	172
シラーズ	175
詩人ハイエズ、サーディの墓	176
ゼンド王朝の始祖カリム・ハンの都	179
ペルセポリス——ダリウス大帝の宮殿	180
パサールガデ——上代の首都	184
ブシールに向う	186
ブシールからマホメラまで——シュシユタール——スーザ	188
英波石油会社	189
油田を訪う	191
ペルシア展望	194
サッサニア王朝の文化	194
ペルシアの女	202
ペルシアの新婚姻法	210
ペルシアの宗教——マホメット教——シーア派	213
ペルシア絨緞	223
ペルシアの軍隊	225
ペルシアの芸術	230
草に生きるもの——漂泊の部落	243

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

沙漠のあけぼの——アラビアの空

パグダッド——ファイサル王に謁見

沙漠飛行 2553

君府の想い出——金角江のほとり

君府——「幸福の門」 2558

人種の市——言語の市 260

ラマザンの一夜 263

乞食と犬 268

潔癖の国民 270

経済的能力 273

婦人の地位 275

ロシア貴族 277

白と赤 279

回教雑聞

サラーム・アレイクム 285

回教徒の女性生活 288

イスラム伝説における妖怪変化について 294

イスラム文学の展望 298

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

ダンテ神曲に及ぼせるイスラム思想の影響

317

大東亜の回教徒

回教概説

33213

東洋と回教

3215

マホメットの奇蹟

327

コーラン

329

偶像排斥

330

経典の純粹性

333

正導者の再来

335

世界教と禁酒

337

回教の礼拝

340

ラマダーンの断食

341

豚と回教

343

高利貸根性と回教

344

メッカ巡礼と回教の聯盟総会

346

回教宗派の矛盾

347

アラビア語とタガログ語

349

「光は東方より」

351

祭政一致と婦人の地位

353

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

回教徒に接する心得

□□□□□

大東亜戦争と各地の回教徒

日本の回教徒

357

満洲の回教徒

359

支那の回教徒

360

フィリッピンのモロ族回教徒

361

旧蘭印の回教徒

365

インドの回教徒

372

374

362

374

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

〈戦前戦中〉外交官の見た回教世界

笠間果雄著作選集



凡例

一、本書は笠間景雄が著した以下の著書から本書書名に適う部分を集めて一書にしたものである。

『回教徒』一九三九年、岩波書店刊行（岩波新書）

『沙漠の国』一九三五年、岩波書店刊行

『青刷飛脚』一九四一年、六興商会出版部刊行

『大東亜の回教徒』一九四三年、六興商会出版部刊行

『回教徒』は本文のすべてを収録した。「回教雑聞」の部は『青刷飛脚』中の「回教雑聞」の章である。『沙漠の国』には多數の写真が掲載されているが、そのほとんどを省いた。

一、本書では新漢字、新仮名遣いを使用した。異体字関係にある漢字は現今一般的なもののはうを使用した。「廿」は便宜的に「二十」に置き換えた。

一、踊り字は「々」のみを使用した。二の字点は「々」に置き換えた。

一、現今漢字表記が避けられる傾向があるものは仮名に置き換えた。例、印度。

一、送り仮名を現代的に加減した。

一、読み仮名ルビを加減し、句読点を補つたところがある。

一、鍵括弧の形状の使い分けは現今通行のものを使用した。

一、二行割の注記は本書刊行所によるものである。

一、頻出する、各書において表記の異なる語は統一した。例、アラビヤ／アラビア。（その処置に伴つて表記を変更した語がある。例、リビヤ→リビア。）全体として片仮名語の表記不統一がかなり多いが、どの表記に統一すべきか判断しがたいため、表記統一は広く知られる国名・地域名に限った。

一、誤った認識と見るべき記述に対しても注記はしていないが、ごく基本的な事柄で簡単に示せるものについては「(ママ)」のルビを以て示唆したところがある。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

回教徒
SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

一九三九年刊行

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

大慈大悲のアルラーの御名において、

万有の主、大慈大悲の御神、審判の日の主たるアルラーに榮光あれ。

われらなんじに仕えまり、なんじが御護を希う。

おおけなくもわれらを正しきもの、或いはなんじが御恵をたまわんものの道へみちびきて、
なんじが怒りたまい、またざまよえるものの道へとみちびきたまうことなけれ。

(コーラン、序章)^{ファーティハ}

序　言

回教徒といえばアラビア夜話を想い起すほど、遠い国の親しみのない宗教信者と考えられる。しかし三億に近いアジア民族が回教徒であり、満支、蒙疆から西亞やアフリカまで、この信徒が一種の防共の鎖を結び、南洋からインド、エジプトに至る我が国の貿易線に沿うて住んでいる現実の民族であることを知るときに、我々は今更ながら我が国において回教及びその民族について認識の欠けているのを痛感する。東亞に新しき秩序を樹立し、アジア興隆の指導者を以て任ずる日本国民が、その宗教法においてすら今日なおアジア民族の宗教たる回教をキリスト教と同列に置かないと言うに至つては、啞然として驚くの外ない。これは今なお西欧人の作った旧体制のもとに、多くは不幸なる存在を続けてゐるアジア民族を指導する日本人の天与の使命を、自ら進んで拠棄すると宣言したことにも当るのである。

この書はかくの如き我が国人の認識不足を是正する目的を以て書かれた読本である。学者に対する研究書では無い。従つて回教世界についての一般的手引書たることを目的とし、成るべく通俗平易を旨とした。例えば固有名でも「コーラン」、「マホメット」の如く、眞実の発音と違うものでも、通用の読み方を採用したのである。

この書の資料となつたものは主として西欧人の著書と筆者自身の体験とであるが、邦文では外務省調査部刊行の回教事情所載の記事等をも参照した。

回教と回教徒の生活を認識するのは刻下の緊要であり、この書が我が国民の一人でも多くにこの点で多少とも関心を促す役に立つならば著者の望みは足りるのである。

昭和十四年三月一日

著者　識

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

大慈大悲のアルラーの御名において宣べよ、
アルラーは唯一のものなり、アルラーは一切を護るものなり、アルラーは生みしことなく、生
まれしこともなし。アルラーに較ぶべきもの世にはあらじ（ヨーラン、一一一、一）
生

回教総説

一 回教という名称

本書の題名にも書いた通り、日本では、マホメットを教祖とするこの宗教を回教と呼んでいる。これは、支那で一般に用いられる名称を転用したものであるが、日本でこの名称を用いるのは謬りでないまでも、あまり適當ではない。回教というのは回々教の略で、回々の宗教という意味である。しかし元来この宗教の正しい名称は、「イスラーム」というのであって、これは、アラビア語の「アスラーム」から来て神に帰依する意味であり、しかも神に帰依して、人に善根を施し、迷うことなく、平和な心を持つ人の事をムスリムと呼ぶのである。現在ヨーロッパでは、回教徒のことをモスレム、ムスルマンとかミュズルマンと呼びなすものもこのためであり、又イスラーム教を教祖の名に因んでマホメット教と呼び、キリスト教に対比せしめ、教徒をマホメダンと呼んでいる。支那の回教徒自身も回々などと呼ばれるのを喜ばず、イスラームの意味をとつて、清真教、伊斯蘭等と称し、又ムスリムを漢訳して、穆民などという名称を用いる位であつて、回教という名称は、支那と、日本において通称として用いられるだけである。何故イスラーム教を回教、或いは回々教と呼ぶかということを次に述べよう。

通説によると、回教、即ち回々教の回々という字は、ホイホイ回鶻ウイグル（回紇）民族を通じて回教が支那に伝わったため、回鶻の

宗教という意味で、これを回々教、回教、その地域を回部等と呼ぶようになったといわれている。

ところがこの回々という文字の現れた歴史を調べてみると、大体宋末元初の頃であって、しかもその当時の中央アジアの旅行記等には、回々という文字と並んで回鶻という文字が用いられ、両者が著しく混同されており、更にこの回鶻ウイグルを畏兀ウイグル兜その他のあて字で記してある。こうなると、どうも、通説の回々は回鶻から来たという説が一寸怪しく思われてくるのである。そのためか明末に到ると、支那の回教学者の中には、回々の解釈に種々説を立ててあれはイスラーム教の本義である、アラーの神に帰依する意味を現したもので、回とは帰の意味であり、回々と重ねたのは、身体がこの現世の汚れから脱して、精神が神の世に回り帰る意味なのだと真しやかに説く者が現れて來た。その後も外国人がこの問題を色々研究して種々説を立てているが、どうも臆説の範囲を出ないようである。

結局この問題は歴史上から検討してみるより外はない。

回教と支那との交渉は唐初まで遡ることが出来るが、当時の支那人はアラビア人を大食人、或いは天方人と呼んで、別段宗教的に特殊な民族とは考えなかつたらしいのである。その後安禄山の大乱によつて、西域における唐の勢力は全く衰え、更に現在の西藏の地に起つた吐蕃が西域諸国と唐との交通を遮断することになり、東西の交通は、五胡十六国時代、宋代を通じてほとんど絶えてしまつた。しかるにその後元が勃興して南北支那を統一し、東西の交通が回復されるに及んで、再び支那と西域とは交渉するに到つたのである。唐代において支那の知つていた回鶻人というものは決して回教を信奉したものではなく、景教やマニ教（摩尼）や祆教の支配下にあつたものであつたが、（この回鶻はトルコ種であり、むかしばは仏教を信じていたが、時代を累ねて大抵の宗教を一わたり信じた民族である。）今や元朝時代に交渉を再開した回鶻人は既に東漸し來たつたイラン民族と混交した雜種となり、イスラームの勢力下に圧倒されて、中央アジアの一部を除き、回教文化圏内に融合されてしまつてゐた。従つて唐時代の古典的觀点からこれを見るときには、甚だ回鶻人らしくないものとなつてゐたであらう。支那人は、これ等のイスラーム化された回鶻人をも、他のイスラーム化されたトルコ、イラン等の雜種民族と一緒に、唐代の回鶻民族の子孫と考えた。即ち久しい間の東西交通遮断がこの

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

沙漠の国
SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

一九三五年刊行

序

私は過去十数年にわたる在外生活の間に、あまり我が国人に知られていない東洋、即ち中央及び西方アジアに駐在するの幸運を持った。これ等の国々で折にふれて筆にしたものを集めのがこの書である。即ちトルコ、ペルシア、アラビアなどの最も永く滞在した地方の漫遊記を主として、その外の任地で書いた隨筆などをも合わせて公にすることにした。

日本が東洋の指導者たるべきことは、私などに取っては久しきに亘る不抜の信念である。しかしこの書が偶然にも、我々の知る東洋の、如何にその極東に限られた一小部分に過ぎざるかを如実に示すのに役立つならば、日本人の自己陶酔を匡正するだけにでも、多少の存在の価値があると思う。近くまで欧米人の作つた世界秩序の下で、不幸な存在を続けて来た多くの東洋民族にとって如何なる将来が示唆せられて居り、我々日本人の役割が何であるかを、この書などの与うる認識を基礎として明示する人が出て来たならば、筆者の目的はもつと有効に酬いられることになる。

隨筆の多くは文芸春秋、改造などに寄せた旧稿に少しく推敲を加えたものである。

草稿の整理などには友人佐藤莊一郎君に、淨書、校正等には鈴木修次君に負うところが多い。なお幸田成友博士、青山新君等にもいろいろ援助を仰いだことを、ここに特記して深厚なる謝意を表して置く。

昭和十年五月

著者

ペルシアへ

バクーからテヘランへ

モスコーカラの急行列車が、半時間程の延着を途中で取り戻して、正に夜の十一時半に静々とバクーの停車場へ滑り込んだ。

「バクーへ着くと何の訳とも知らずに涙がハラハラと出ますよ」

と私の前任者のHN夫人が云つた。HN夫妻は長らくロシアに在勤したロシア通であるが、バクーがスラヴ文明の最後の別れ場で、ここを出れば最早や端倪すべからざるペルシア、未だ見ぬ不可思議なイラン高原で、「文明」とはしばらく縁が切れるという気持を私に教えたものと思われる。

バクー在勤のペルシア領事から色々歓待を受け、一夜をバクーの幼稚なホテルに過ごした。

バクーは世界最大の油田、全市が文字通り石油坑のバクーから、黒海のバツームまで、コーカサスを横断して五百マイルの送油管が設けてあって、ソヴィエットの大世帯の台所を賄っている。行けども行けども石油井の櫓の林である。海の中には櫓が見える。海面もギラギラと浮いた油に光っている。イギリスが、ソヴィエット革命当時、コーカサスを独立させて、この地方を自国の勢力下に置こうとしたが、失敗に帰した。當時到る処にジョルジア国の公使館と称す

SAMPLE
Shishi-Shansui.com

るものがあつたのは、この地方が英仏等の支援を受けて独立運動を試みたその活躍の片影であつたが、今ではアルメニアなどと同じ運命で、ソヴィエット聯邦の中の一員になつたアゼルバイジャン共和国の首府が、このバクーである。テヘランには私の代理として公使館創設の準備に当つていたN書記官が、明日にも知れぬ重態であつた。モスコーで急電に接したので、出来るならば直ぐ様飛行機でと地踏鞴(じだんぱ)を踏んだが、冬のさなかで飛行便はなく、やむを得ず、テヘランの公使館からバクーまで出迎えに来てくれたカルデア人の通訳が、ここで準備させてあつた飛行機を頼りとすることにしたが、天候の加減で対岸のパハラヴィーまでは翌日出帆の汽船をとるより外に仕方がなかつた。十二月初めの身に沁みるコーカサス風が、蕭条と裏海の水面を撫でて行くところ、ペルシア連絡船は寒さ凌ぎの足踏をでもするようにならざるを得ない。その小さい船体を、桟橋の横に起伏させながら、私達を待つていた。

出国手続はソヴィエット官憲の厳しい検査のために仲々面倒だ。私の連れていたH青年は、数多い日本の書物を一々丹念に検査されたがその中から私の友人Tから貰つた五十円の日本紙幣が偶然(ひょづれん)出て来た。それがソヴィエット入国取締規定に抵触するとあって事態大いに紛糾、しばらくの間税関官吏との押し問答が繰り返された。ようやくのことで没収の憂き目だけは免れて、虎の尾を踏み毒蛇の口を脱れたる心地というほどでもあるまいが、虎の子を失くしかけた騒ぎに口をとがらしながら船に乗つた。

裏海の船は、昔の房州通いのような小さなもので、加うるにコーカサス風が吹きつけるために、平日(ひつも)はかなり激しく揺れるのであるが、この日は和風麗日、寒さは相当に骨身にこたえたが、船の動搖は思いの外に少かつた。油坑の櫓の林が段々後に震んで行くと、東の方コーカサスの雪を戴く山々が厳かに見える。間もなくそれも消えて対岸が茫と見えなくなる内に、日は暮れてしまった。

舟航十七時間ばかりで、翌朝対岸のパハラヴィー港に着く。昔エンゼリと云つた港である。ここでソヴィエットとペルシアとの合弁漁業会社が、世界一のキヤヴィアールを作つてゐる。酒客なれば低徊して去るに忍びないところである。自然の河口を利用した淋しい港の入口に所在無さそうに佇んで居る灯台の下を過ぎると、防波堤に高く日の丸の旗

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

回教雑聞
SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

一九四一年刊行
（『青刷飛脚』）

サラーム・アレイクム

マホメット教の信者が二人寄ると、一人は右手を胸のところか、又は額につけて「サラーム・アレイクム」という。相手もまた同じ姿勢で、同じ言葉をいう。「平安御身にあれ」という意味で、異教徒に対する場合などは時として、「アレイクム・サラーム」と逆にして答える。この簡単なアラビア語で、イラン人も、トルコ人も、アフガン人も、インド人も、マレー人や支那人も、人種や言語の差別を超えて、相互に回教徒として挨拶を交すのである。

回教は世界教だ。これを信ずる三億七千万の教徒は人種や風俗や言語を異にするが、厳肅な戒律と、アラビア語で読むコーランの文句と、「サラーム・アレイクム」の挨拶だけは、世界共通だ。彼等はこの三つで団結を堅め、親和力を深めている。

先頃代々木の原に建てられた回教徒礼拝堂に、世界各国の信徒代表が集まり、お互いの言語の通ぜぬものが五、六十人も会同した。唯この「サラーム」の挨拶だけはほとんど共通の世界語で、一人も残らず言つた。日本の信徒でメツカの巡礼などに行く青年には、これ一つしかアラビア語を知らないのが沢山居る。もつとも入信のとき発言する三つの文句はアラビア語でいうが、実用の会話ではこれ一つということになる。

* *

世界共通の挨拶では、このサラームの外に握手と接吻がある。日本ではこの二つを西洋人の発明と考えているものが多い。これはパパ・ママを英語と考えたと同じ誤りである。第一英語にパパという語はない。

握手も接吻も人間の自然で、世界中にあるが、早いところでは、やはりユダヤ、アラビアの文献であろう。聖書ではパウロの書翰の結びに度々出てくる。

アイノ研究の権威バチエラー博士の放送によると、五、六十年前の話で、アイノの老人が博士の親切に感謝して、そ

の手に接吻したことである。日本人の公の挨拶にアイノの接吻が伝わらなかつたのは、少し不思議な感じがする。

*
*

回教徒のサラームの身振りは、一つの信仰、一つの思想、一つのイデオロギーを現す形式で世界的であるが、ナチスやファッショの右手を擧げる挨拶も、左翼のこぶしをつき出すのと同様、世界的にイデオロギーの分野を身振りで示すようなものになつた。拳手の礼はもと掌を示して相手に服従する意味であつたろうが、今では唯の敬意として世界的になつた。もつとも国によつて多少形式は違う。物まねの好きな日本人が、普通の拳手や握手を採りながら、まだファッショの敬礼を採用せぬのは、日本人はその敬礼の方式を好みないのであらうか。

*

洋装婦人の帽子を脱ぐのが問題になつたが、脱帽が敬意を意味する場合と、逆に失礼になる場合とあるのを忘れた議論だ。洋装の脱帽は明らかに失礼であろう。現に回教徒は人に会うとき、寺院に入るとき、礼をするときなど、必ず帽をかぶつていなくてはならない。トルコ帽はもとハンガリーのものを採用した沿革があり、今ではトルコでは禁止されているが、アラビア、エジプトなどでは、今にこれを頑いでいる。真夏の暑さに堪えかねたとき、人の見ないところでそつと脱帽するほど、帽をとるのは失礼だ。夏の宴席などで、誠に失礼ですが、帽を脱がせて戴きますと断つて、許しを得る例がいくらもある。

靴を腕ぐのも歐米では失禮で、日本をはじめ東洋諸国では時としては礼儀である。回教徒がお寺に入るときは必ず素足である。従つて先頃来たようなお客様を日本家屋へ招くのは實に自然で、黙つていてもお客様は玄関で靴をぬぐのである。先年故タフト氏が大統領をやめて日本へ來たとき、親交のあつた故新渡戸博士に招かれて紅葉館へ行つたことがあつた。玄関で思いがけなく靴を脱がされたタフト氏の靴下に、大きな穴があいていた。氏は恥ずかしそうに博士にこの穴を示して、このままでも失礼には当らないだろかと質ねた。タフト氏は久しく鰐やもめであったのだ。

*

前世紀のビルマの歴史の最大事件の一つは、外国人特に英人が王宮に伺候するとき、靴を脱がすべきや、否やという問題であった。要するに礼儀というものは多分に地理的因素を備えているものだ。靴をとるのが敬意の場合と脱帽が敬意の場合とは、思想の問題でなく地理の問題である。何れも起源としてはタブーの要素を有っているのは疑いを容れない。

脱帽ぐらいではなく、脱衣をして裸を見せるのが礼儀のところもある。エチオピアでは客人の上衣を脱がせて、主人はこれを腰に纏うのだ。クックの南洋紀行によれば、タヒチの酋長に謁するときは、腰から上は裸にならなければ甚だしい非礼になる。

*

挨拶のうちでも面白いのは、西藏の舌を出す礼儀であるが、黒人^{ニグロ}同士が会うと按摩のやるように、指を引っ張つてカツンと音をたてるのもおかしな式だ。むかしのフランク人は挨拶のとき髪をひきむしって相手に捧げたとある。イギリスなどの旧い習慣にある、愛人に自分の髪を贈るのは、恐らくこの遺習であろう。ブラウニング夫人の詩にも、

わが贈る髪のひとふき

この外にかつて贈りし主一人あらじ、わが君
とある。

今どきの女だったら、いつの間にか禿頭になってしまふだろう。

*

言葉でいう挨拶では回教徒のサラームほど、うつくしいものはない。日本の「お早よう」はいいが「今日は」はあまりきれいでない。英独仏などは皆きたない散文的の語だ。ロシア語の「ズドラストヴィチエ」はうつくしい。欧洲語の挨拶に比べると、南アのオランジ河の水源近くに棲むバストー人の挨拶は、「タマ・セヴァータ」（お早よう猛獸！）と叫ぶのだが、ずっと美しい音である。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

大東亜の回教徒
SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

一九四三年刊行

大東亜戦争と各地の回教徒

日本の回教徒

キリスト教は、徳川幕府が厳重な鎖国政策を行っていたにも拘らず、永年執拗なる手段をもつて日本民族に接触を企てていた。このことは青史に明らかであるが、回教は何故か日本の歴史の上では交渉が極めて乏しい。

上代の日本人は、西域の文化を支那から摂取していく、例えば雅楽に大食調（^{ターキー}大食はアラビアの支那名）などがあるよう、その影響が残っているにも拘らず、回教関係の接触はほとんどなかつた。しかし南北朝から足利初期にかけて、南洋方面に来たアラビア人と日本人との間に交渉があつたことは確実である。例えば大江匡房が幼にしてイラン語に通じたとあるが、彼の残した若干の単語は、ことごとくインドネシア語である。

大乗院寺社雑事記中の文明十二年十二月（西紀一四八〇年）の条に楠葉入道西忍という者の記事がある。西忍は当時日本と支那との貿易品の価格について、その相場の開きを々々挙げている。現在の通商顧問といったような役目を行つていた者であろう。西忍は、ムスルと称したアラビア人と大和の国楠葉の婦人との間に出来た子であつて、母の出生地に因んで楠葉西忍と名づけられた。父は回教徒であるが、彼自身は転向して仏教に帰依した。

この記録の外には、日本における回教の歴史はないといつてい。最近の支那事変頃までの日本と回教との接触は寂

寥々たる有様であった。

現在の日本人回教徒は、多くは支那において清真教徒と交りを結び、支那人を通じて回教の何たるかを知り、回教に入信した人々である。一つの異例として、前に述べた有賀文八郎氏がいる。氏は明治二十五年頃南洋に渡航し、当時はキリスト教徒であつたが、インド貿易に従事中、イスラムの信者と交り、その教義の簡明さや、教徒の純真な生活に動かされて、回教こそ現代宗教の優秀なるものと信じ、昭和初期に神戸でインド人の教徒から入信式を行つてもらい、爾來回教の日本化を志し、熱心に伝道しているのである。有賀氏の日本イスラム教は、日本人としての愛国精神を基幹となし、イスラムの本義を提倡するにあつて、戒律は必ずしもアラビア人やトルコ人の奉ずるものに盲従しないのである。経文も祈禱も日本語であり、皇室を奉敬し、父母兄姉同胞の相愛を説き、日本精神を中心とした進歩的回教である。勿論入信の式に割礼などは行わない。

日本人で初めて聖地メッカへ巡礼した人には、明治四十二年に山岡光太郎氏があり、その後我が国回教徒の先覚者田中逸平翁がある。が、その他六、七人を数えるだけである。田中翁の如きは第二回巡礼の途次、病を得て斃れていった。

今や南方の皇軍占領地は、治安も恢復し、適切なる軍政下にあつて建設の過程に進展しているが、我が日本人回教徒は、南方諸地域の回教徒たる夥しいインドネシア民族の中に挺身没入して、日本の正義を説き、大愛慈悲の精神に生きて、軍政の一翼を担当し、彼等原住民をして眞に東亜共栄圏の一人たる覚悟と誇りとを持たしむべく努力しつつある。そのわざかな日本人回教関係者こそ、今後の南方建設の上に重大な寄与をなし得るものと信ぜられる。

以上の日本人の回教徒の外、日本に在住する外人の回教徒の大部分は、トルコ、タタール系の民族であつて、ソヴィエット革命後、白系ロシア人として満洲、支那、日本に亡命して来た者である。日本居住者は六百名程度であり、主に羅紗の行商などを行つて生活し、日本の各地に散在している。この外、インド、アラビア、シリヤなどの回教徒が若干在留している。

従来、日本における回教徒の礼拝堂は、在留トルコ、タタール人の手に成った東京回教学校内の小礼拝堂の外は、英

領インド人が出資して昭和十年神戸に完成した回教寺院があるばかりであつたが、マホメット生誕千六百四十七年、即ち昭和十三年五月十二日に、東京の一角、代々木の櫟林の中に、初めて日本人の喜捨によつて回教寺院が建立されたのである。

満洲の回教徒

満洲国の回教は、満洲国内に拡まつてゐる他宗教と比較すると最も劣勢である。教徒の人口の最も少ない例を挙げれば、國務院統計処の年報に二十五万と報ぜられてゐる。我が國の支那回教学者の推定によれば、二百万ないし二百五十万と称されてゐる。その九割までは支那内地の漢回系の移住者であり、他にはソヴィエット領から革命後流入した白系トルコ、タタール人の回教徒が一割を占めているものと推察される。

このトルコ系タタール人回教徒は、一九一七ロシア第二次革命の際、民族運動の復興を志し、在ロシア回教徒の統合を策劃したが、ソヴィエットの無宗教主義が確立されたのをみて欧亜の各地に遁れたのである。この運動は今日でもイディル・ウラル・トルコ文化協会として、作家アヤス・イスハキに指導され、各地に流離してゐるトルコ系信徒に呼びかけ、満洲では奉天にその支部がある。日本に居住しているほとんど全部の回教徒もこれに属している。

満洲へ回教が伝來してきたのは比較的新しいことで、元明の時代にも少数の移住者があつたが、大量に移住したのは乾隆帝の初期、西紀一七四〇年頃からである。これは漢人の自由移入主義を認め出した結果に外ならない。

満洲国の回教徒の分布を清真寺の所在等から点検すると、旧奉天省即ち奉天、安東、錦州等に最も多く、元の吉林省や熱河省がこれに次ぎ、旧黒竜江省は最も少ない。しかして漢人化した漢回が最も多く、混血の濃い東干族には稀で、多くは北滿に小集団をなしている。

満洲の回教徒で記憶すべきは、日清役の勇将であつた忠壯公左左宝貴が熱心なる信者で、満洲回教の發展に輝かしい貢